

スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究 : 調査結果の検討

山本, 教人
Institute of Health Science, Kyushu University

吉田, 毅
Institute of Health Science, Kyushu University

多々納, 秀雄
Institute of Health Science, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/688>

出版情報 : 健康科学. 21, pp.77-91, 1999-03-15. 九州大学健康科学センター
バージョン :
権利関係 :

— 研究資料 —

スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究

— 調査結果の検討 —

山 本 教 人 吉 田 毅 多々納 秀 雄

A Sociological Study on Retirement of Athletes

Norihito YAMAMOTO, Takeshi YOSHIDA and Hideo TATANO

研究目的

スポーツ選手の引退に対する社会学的な関心は、北米の学会を中心として1980年代から高まりをみせてきており、エリート・スポーツからの引退は「社会的な死」であるとする見解に、様々な研究者が賛否両方の結論を提出してきた^{1)~3), 5)~8), 10), 11)}。一方わが国においては、この種の問題に関する研究の必要性は自覚されつつ^{9), 13)}も、選手の引退に焦点化した実証的な研究は意外に少ない。このようなことから、本研究においては、競技生活からの引退をめぐる問題を明らかにすることを目的に、過去に高いレベルで競技生活を送ってきた選手を対象に、質問紙法による調査を行った。近年では引退問題についての質的研究の必要性が議論されるようになってきている^{1), 13)}ことは自覚しているが、本研究では、まずは競技生活からの引退の何が問題なのかを量的に把握することにした。

研究方法

1. 調査の対象と方法

本研究で調査の対象となったのは、関東地区の4大学で、サッカー部と陸上部に所属していた男子卒業生たちであった。4校はいずれもが、大学サッカーや陸上界で有名な大学である。性別を男性に限定したのは、引退の影響がその後の職業生活に及ぼす影響をみやすいのではないかと想定したため、対象種目を上記2種目とした理由は、選手の引退を個人種目、集団種目といった種目特性の観点から検討するためである。また、

本研究はスポーツ選手の引退の研究であることから、大学卒業後現役選手として活動している可能性のある年齢層の者を予め調査対象者から除外し、35歳以上の者をそれとして選出した。

調査票は、1996年10月から11月にかけて郵送され、同年11月末日までに回答のあったものを分析の対象とした。合計1,000が郵送され、その内の586部が返送された（回収率58.6%）。以下の分析には、これら返送された調査票のうち、女性と20歳代の者計2名の回答を除いた584部が用いられた。

2. 調査の内容

調査は、大別して職業や収入などの基本的属性要因、これまでの競技に関わる要因、引退に関わる要因、そして引退後の生活や意識に関わる4要因によって構成されている。引退の問題は、過去のキャリア形成のあり方と不可分であること、またそれがその後の人生においても重要な意味をもつことから、時系列的なパースペクティブから質問紙を構成した。

結果と考察

1. サンプルの属性

表1-1に示すように、本研究のサンプルは関東地区の4大学の男子卒業生、584名であった。4校のうち国立大学は1校、あとの3校は私立の大学である。調査対象者の年齢は、平均が44.6歳(SD 6.3)で、40歳代がサンプルのほぼ半数を占めている。続いて、30歳代、50歳代がほぼ同様の割合であった。60歳代は極め

表1-1 サンプルの属性

属性	N(%)	属性	N(%)
大学		職業	
A校	130(22.3)	農林漁業	0
B校	124(21.2)	会社員	84(14.4)
C校	100(17.1)	公務員・教員	411(70.6)
D校	230(39.4)	商業	20(3.4)
年齢		他の自営業	5(0.9)
30歳代	157(26.9)	会社役員	29(5.0)
40歳代	279(47.9)	その他	33(5.7)
50歳代	142(24.3)	年収	
60歳代	5(0.9)	400万円未満	7(1.2)
種目		400～700万円未満	247(43.6)
サッカー	351(60.7)	700～1,000万円未満	217(38.3)
陸上	227(39.3)	1,000円以上	96(16.9)

表2-1 競技スポーツを始めた時期

	小学校以前	小学低学年	小学高学年	中学	高校	大学	$\chi^2=.269^{***}$
サッカー	0	11(3.1)	60(17.1)	167(47.6)	96(27.4)	17(4.8)	
陸上	0	3(1.3)	9(4.0)	109(48.0)	104(45.8)	2(0.9)	
計	0	14(2.4)	69(11.9)	276(47.8)	200(34.6)	19(3.3)	

註) カッコ内は% *** p<.001

て少なかった。35歳以上を対象に質問紙を郵送したにも関わらず、30歳代のサンプルのなかには、34歳の者が4名ほど含まれていたが、既に競技生活から引退した者であったため分析の対象外としなかった。調査の対象とした競技種目の比率は、サッカーが全体の60%、陸上が40%であった。

現在の職業で最も多かったのが「公務員・教員」の71%、続いて「会社員」の14%であり、両者で全体の85%を占めている。年収に関しては、「さしつかえなければ、お答えください」という条件付きのものであったにも関わらず、無回答は17名と実に少数であった。サンプルの82%ほどが「700万～1,000万円未満」、「400万～700万円未満」に位置づけられている。「1,000万円以上」の者も17%ほどいたが、「400万円未満」の者は1%とごく少数であった。

本研究のサンプルの特徴についてまとめておこう。関東地区の4大学で、サッカーと陸上の競技経験を有する男子卒業生を対象に質問紙を配布し、584名より分析に有効な回答を得た。年齢層では40歳代が約半数を占めており、職業では71%が「公務員・教員」であった。これらの多くは中学校や高校の教員であると予

測される。また、回答を保留する者の割合が高いのではないかと予想されていた年収に関しても、ほとんど記入漏れがなく、半数以上が700万円以上の年収を得ていた。

2. 過去の競技歴

選手たちの過去の競技歴に関して、ここではまず、サッカーや陸上競技に関わるようになった時期について明らかにされる。続いて、小学生時代、中学生時代、高校生時代、大学生時代、社会人時代の時代区分で、競技への傾倒度、一流選手になりたいという意識の強さ、競技成績などが検討される。最後に、大学への進学とそれに及ぼした他者の影響などをみتينことにする。

表2-1に示すように、競技スポーツを始めた時期に関しては、選手たちの約50%が「中学校から」と答えている。「高校から」をも含めると、これらの時期に競技スポーツを開始した者の数は全体の80%以上にもなる。競技種目と競技を始めた時期の関係についてみると、両者の関係が独立であるという帰無仮説は有意水準0.1%で却下されている。つまり、競技を始

めた時期は、サッカーも陸上も「中学校から」とする者が最も多いものの、陸上においては、「高校から」始めた者をあわせると94%に達している。一方サッカーでは、「高校から」の数値が陸上に比較して20%ほど減少し、代わりに「小学校から」始めた者の割合が高くなっている。このように、競技に関わりを持ち始めた時期に関する比較からは、陸上と比較した場合のサッカーの早期社会化傾向を指摘しておくことができるだろう。

続いて、競技スポーツへの傾倒度を、小、中、高、大、社会人といったそれぞれの時期において、生活の他の側面をどの程度犠牲にしたかという観点から検討してみよう。表2-2に明らかなように、競技種目と生活の犠牲度との関連は、社会人時代を除いて独立であると考えて良い。したがってここでは、主に全体の傾向をながめてみることにする。小学生時代においては、「ほとんど犠牲にできなかった」者の割合が53%と最も高く、「それほど犠牲にできなかった」者を含めると、全体の94%がこれらのカテゴリーにあてはまる。中学生時代においてもこれらの傾向に著しい変化は認められないが、「それほど犠牲にできなかった」者の割合が全体の53%を占め最も高く、「ほとんど犠牲にできなかった」者は小学生時代の約半数に落ち込んでいる。両者をあわせ全体の77%がこれらのカテゴリーにあては

まる。高校生時代になるとこれまでの傾向に大きな違いが生じてくる。全体的には「それほど犠牲にできなかった」が41%と最も高い割合を示すものの、次に高い割合を示すカテゴリーは「多くを犠牲にした」の38%であった。「それほど」と「ほとんど」を含めた「犠牲にできなかった」者の割合が49%であるのに対して、「ほとんどすべてを」と「多くを」を含めた「犠牲にした」者の割合は51%を示し、生活の他の側面を犠牲にして競技スポーツに取り組んだ者の数が半数を超えている。大学生時代になるとこの傾向は一段と顕著になる。即ち、これまでの時期とは違って、「多くを犠牲にした」者の割合が40%で最も高い値を示すようになり、「ほとんどすべてを」と「多くを」を含めて「犠牲にした」者の割合は67%に達している。しかしながら、社会人時代になると「それほど犠牲にできなかった」者が全体の50%を占めるようになり、「ほとんどすべてを犠牲にした」と「多くを犠牲にした」者は34%にまで落ち込み、再び犠牲度の関係は逆転する。このようにみても、学年の進行にともなって生活の他の側面を犠牲にした競技スポーツへの傾倒が多くの選手に認められ、それは大学生時代に頂点に達するが、社会人になるとその傾向に減退がみられるようになるというパターンが確認できそうである。なお、競技種目と生活の他の側面の犠牲度との関係が独立であるとい

表2-2 競技スポーツへの傾倒度

	ほとんどすべてを犠牲	多くを犠牲	それほど犠牲にしない	ほとんど犠牲にしない
小学生時代 $\chi^2=.209$				
サッカー	2(2.9)	3(4.3)	30(43.5)	34(49.3)
陸上	0	0	2(20.0)	8(80.0)
計	2(2.5)	3(3.8)	32(40.5)	42(53.2)
中学生時代 $\chi^2=.120$				
サッカー	10(4.3)	44(19.0)	128(55.4)	49(21.2)
陸上	8(6.9)	18(15.5)	55(47.4)	35(30.2)
計	18(5.2)	62(17.9)	183(52.7)	84(24.2)
高校生時代 $\chi^2=.107$				
サッカー	33(10.2)	133(40.9)	131(40.3)	28(8.6)
陸上	37(16.7)	75(33.8)	92(41.4)	18(8.1)
計	70(12.8)	208(38.0)	223(40.8)	46(8.4)
大学生時代 $\chi^2=.064$				
サッカー	87(25.7)	130(38.3)	102(30.1)	20(5.9)
陸上	64(28.6)	93(41.5)	55(24.6)	12(5.4)
計	151(26.8)	223(39.6)	157(27.9)	32(5.7)
社会人時代 $\chi^2=.153^*$				
サッカー	15(5.5)	93(33.8)	133(48.4)	34(12.4)
陸上	5(3.1)	37(22.8)	87(53.7)	33(20.4)
計	20(4.6)	130(29.7)	220(50.3)	67(15.3)

註) カッコ内は% * $p<.05$

う帰無仮説が、5%水準の危険率で却下された社会人時代について両種目の違いをみてみると、サッカーにおいて、若干ながら「犠牲にした」者が多いということが確認できるであろう。

次に、過去において一流選手になりたいとどの程度思っていたかの検討に移ろう。表2-3に示すように、まず全体の傾向についてみてみると、将来一流選手になりたいと「強く思っていた」、「少しは思っていた」者と「あまり思っていなかった」、「全然思っていなかった」者の割合は、小学生時代には49%対51%、中学生時代には65%対35%、そして高校生時代には84%対16%の割合であった。先の競技スポーツへの傾倒度に関する結果と同様に、学年の進行にともない一流選手へのあこがれを強くしていく者の増加傾向を示す結果であった。表の情報は、競技種目と一流選手になりたいという思いの程度との関係には関連性は認められないとする帰無仮説が、小学生時代、高校生時代においてそれぞれ5%水準の危険率で却下されていることを示しているので、このことについても若干検討しておこう。小学生時代については検定の対象となったサンプル数が少ないため、結果の信頼性に問題があると思われるが、結果は陸上において「全然思っていなかつ

た」とする者の数がサッカーに比べて多いということがいえるであろう。高校生時代になると、「強く思っていた」者は陸上において多くを占め、「全然思っていなかった」者はサッカーにおいて高い割合を示している。学年の進行とともに一流選手への思いを強くする者が増加していくという全体の傾向は、陸上選手において最もよくあてはまる傾向だといえるのかも知れない。

さて、以上のような一流選手になりたいという願いは、その後の競技生活においてどれくらいかなえられたかであろうか。表2-4には、願いのかなえられた程度を示した。全体的な傾向は、「まあまあかなえられた」とする者が45%を占めているが、「かなえられた」か「かなえられなかった」かの観点から比較してみると、回答は二分化の傾向を示していることが理解できよう（49%対51%）。

続いて、小、中、高、大、社会人の各時期に、彼らが出場した最もレベルの高い大会についてみてみよう。結果は、表2-5に示すとおりである。全体的な傾向は、小、中学生時代に競技を行っていた者の78%から79%にとって、「県大会」あるいは「市・郡・町・村大会」が出場した最もレベルの高い大会であったこ

表2-3 一流選手へのあこがれ

	強く思っていた	少し思っていた	あまり思っていない	全然思っていない
小学生時代 $\chi^2=.368^*$				
サッカー	24(34.3)	18(18.6)	24(34.3)	9(12.9)
陸上	2(18.2)	1(9.1)	2(18.2)	6(54.5)
計	26(32.1)	14(17.3)	26(32.1)	15(18.5)
中学生時代 $\chi^2=.026$				
サッカー	60(26.2)	87(38.0)	57(24.9)	25(10.9)
陸上	31(26.7)	46(39.7)	28(24.1)	11(9.5)
計	91(26.4)	133(38.6)	85(24.6)	36(10.4)
高校生時代 $\chi^2=.139^*$				
サッカー	139(42.2)	124(37.7)	46(14.0)	20(6.1)
陸上	119(52.9)	82(36.4)	18(8.0)	6(2.7)
計	258(46.6)	206(37.2)	64(11.6)	26(4.7)

註) カッコ内は% * $p<.05$

表2-4 願いの達成度

	完全になえられた	まあまあかなえられた	あまりかなえられない	全然かなえられない	$\chi^2=.068$
サッカー	12(4.7)	111(43.0)	90(34.9)	45(17.4)	
陸上	10(5.0)	94(47.0)	57(28.5)	39(19.5)	
計	22(4.8)	205(44.8)	147(32.1)	84(18.3)	

註) カッコ内は%

とを示している。ところが、高校、大学、社会人時代になると、「国際大会」や「全国大会」出場経験者は、それぞれの時期に59%、68%、72%と全体の半数以上を占めるようになってくる。小学生時代から社会人時代へと時代を下るにしたがって、高い実力を示す選手たちが多くなっていく様子がうかがえよう。出場した大会と競技種目との関係についてしてみると、両者の関係が独立であるとする帰無仮説は、中学生時代に1%、高校、大学、社会人時代にそれぞれ0.1%水準の危険率で却下された。中学、高校時代には、陸上選手において「全国大会」への出場経験者がサッカー選手のそれを上回っている（それぞれの時期に、17%に対して5%、69%に対して43%）が、大学、社会人時代になるとその関係は逆転している（それぞれ、45%対58%、55%対65%）。とはいえ、これらの時期においては、陸上選手は「国際大会」出場経験者の数においてサッカー選手のそれを上回っている（それぞれ、18%対13%、14%対9%）。以上のような結果が、調査対象者のうちでも陸上選手に優秀な選手が多くいるということの意味するものなのかどうかは、種目間の出場枠等の違いもあり明確ではない。

表2-6は、小、中、高、大、社会人の時期における代表選手の経験についてまとめたものである。これを見ると、小学生時代においては、「代表経験はない」

者が70%を占めているが、中学生時代になると「市・郡・町・村代表」経験者が32%となり、「代表経験はない」の割合は45%まで下降している。さらに高校生時代には、「県代表」経験者が42%を占めるようになり、学年の進行にともないレベルの高い大会への代表経験者の数が増えてくる傾向が指摘できるかにみえる。ところが、大学生時代には「代表経験はない」が再び半数以上を占めることとなり、こうした傾向性を指摘することは困難であるように思われる。社会人時代には、「県代表」の経験者が45%と最も高い割合を示した。代表経験と種目間の関係は独立とする帰無仮説は、小学生時代を除く各時期において0.1%水準の危険率で却下された。表の情報は、「代表経験はない」者がサッカー選手において多く、「日本代表」や「地区代表」などの経験者が陸上選手において多いということを示していることが理解できよう。しかしながらここでも、サッカー選手と比較した場合の陸上選手の競技成績の優秀さを特徴として指摘してよいのかどうかは分からないように思える。サッカーと陸上とは選手枠の違いが大きく、比較の意味が無いように思えるからである。

表2-7には、選手たちがどのようにして大学へ進学したのかかが示されている。全体的には「一般の入試を受けて」進学した者が76%を占めているが、種目と

表2-5 出場した大会

	国際大会	全国大会	地区大会	県大会	市郡町村大会	その他
小学生時代 $\chi^2=.200$						
サッカー	0	9(13.6)	2(3.0)	13(19.7)	38(57.6)	4(6.1)
陸上	0	0	0	1(10.2)	8(80.0)	1(10.0)
計	0	9(11.8)	2(2.6)	14(18.4)	46(60.5)	5(6.6)
中学生時代 $\chi^2=.230^{**}$						
サッカー	1(0.4)	12(5.4)	26(11.7)	124(55.6)	60(26.9)	0
陸上	0	19(16.5)	17(14.8)	64(55.7)	15(13.0)	0
計	1(0.3)	31(9.2)	43(12.7)	188(55.6)	75(22.2)	0
高校生時代 $\chi^2=.341^{***}$						
サッカー	18(5.5)	141(43.0)	43(13.1)	118(36.0)	7(2.1)	1(0.3)
陸上	11(5.0)	154(69.4)	36(16.2)	16(7.2)	5(2.3)	0
計	29(5.3)	295(53.6)	79(14.4)	134(24.4)	12(2.2)	1(0.2)
大学生時代 $\chi^2=.272^{***}$						
サッカー	44(13.4)	191(58.2)	49(14.9)	3(0.9)	3(0.9)	38(11.6)
陸上	40(18.1)	100(45.2)	50(22.6)	19(8.6)	4(1.8)	8(3.6)
計	84(15.3)	291(53.0)	99(18.0)	22(4.0)	7(1.3)	46(8.4)
社会人時代 $\chi^2=.223^{***}$						
サッカー	24(8.8)	178(65.2)	29(10.6)	15(5.5)	12(4.4)	15(5.5)
陸上	23(14.2)	89(54.9)	22(13.6)	23(14.2)	4(2.5)	1(0.6)
計	47(10.8)	267(61.4)	51(11.7)	38(8.7)	16(3.7)	16(3.7)

註) カッコ内は% ** $p<.01$ *** $p<.001$

表2-6 代表選手の経験

	日本代表	地区代表	県代表	市郡町村代表	なし
小学生時代 $\chi^2=.145$					
サッカー	0	2(3.0)	0	17(25.4)	48(71.6)
陸上	0	0	0	4(4.4)	5(5.6)
計	0	2(2.6)	0	21(27.6)	53(69.7)
中学生時代 $\chi^2=.487^{***}$					
サッカー	0	9(4.2)	26(12.1)	46(21.4)	134(62.3)
陸上	0	6(5.4)	35(31.5)	57(51.4)	13(11.7)
計	0	15(4.6)	61(18.7)	103(31.6)	147(45.1)
高校生時代 $\chi^2=.408^{***}$					
サッカー	17(5.3)	33(10.2)	142(44.0)	21(6.5)	110(34.1)
陸上	12(5.5)	90(41.3)	84(38.5)	12(5.5)	20(9.2)
計	29(5.4)	123(22.7)	226(41.8)	33(6.1)	130(24.0)
大学生時代 $\chi^2=.510^{***}$					
サッカー	42(13.2)	36(11.3)	9(2.8)	4(1.3)	227(71.4)
陸上	36(16.8)	59(27.6)	58(27.1)	9(4.2)	52(24.3)
計	78(14.7)	95(17.9)	67(12.6)	13(2.4)	279(52.4)
社会人時代 $\chi^2=.232^{***}$					
サッカー	20(7.4)	35(13.0)	128(46.7)	15(5.6)	74(27.4)
陸上	23(14.3)	36(22.4)	67(41.6)	15(9.3)	20(12.4)
計	43(10.0)	71(16.5)	193(44.8)	30(7.0)	94(21.8)

註) カッコ内は% *** $p<.001$

表2-7 大学への進学

	推薦	一般	$\chi^2=.137^{***}$
サッカー	66(18.9)	283(81.1)	
陸上	70(30.8)	157(69.2)	
計	136(23.6)	440(76.4)	

註) カッコ内は% *** $p<.001$

進学の仕方の独立性に関する帰無仮説が0.1%水準の危険率で却下されているように、種目により進学の傾向に違いがある様子がうかがえる。即ち、サッカー選手の81%が「一般の入試を受けて」大学に進学しているのに対して、陸上選手ではその値は69%であり、代わりに「推薦」入試による者が31%を占めている。

最後に、大学進学にあたっての他者の影響の度合いが検討された。結果は表2-8に示すとおりである。全体的には、関係者のなかでも大学進学へ「非常に影響を及ぼした」のは「高校時代の指導者」の40%であり、「少し影響を及ぼした」をも含めるとその値は71%にもなる。他者の大学進学への影響と種目間の関係は独立であるとする帰無仮説は、「大学の関係者」と「高校時代の指導者」の比較においてそれぞれ0.1%と5%水準の危険率で却下された。表をみると、陸上選手

の大学進学にあたって、「高校時代の指導者」が「非常に影響を及ぼした」様子をうかがい知ることができるが、サッカー選手と比較した場合の彼らの大学進学をめぐる最も特徴的な点は、「大学の関係者」の影響の強さである。即ち、「大学の関係者」が「非常に影響を及ぼした」のは、陸上の26%に対してサッカーではわずか9%、「少し影響を及ぼした」も含めると影響を及ぼしたとする者は陸上の55%に対してサッカーでは約半数の27%である。陸上選手はサッカー選手よりも「推薦」を経て大学へ進学した者が多かったが、このような結果は、大学進学をめぐる大学の関係者からの働きかけがあったことを物語っているように思われる。

以上のように、本研究の対象者の多くは、中学や高校からそれぞれの競技に関わりを持ち始めていたが、陸上と比較した場合、サッカー選手の早期社会化傾向を指摘することができた。このような傾向は、高校の一流サッカー選手のキャリア獲得過程を検討した研究においても確認されており¹²⁾、種目の特質として考えてよいのかも知れない。また、学年の進行にともない、生活の他の側面を犠牲にして競技スポーツへと傾倒していく者が増加し、将来一流選手になりたいという思いを強くする者も増加していく傾向にあった。これら

の傾向と比例するかのように、選手たちの競技レベルも学年が進行するにしたがって高くなっていく傾向が認められた。サッカー選手と比較した場合、陸上選手において国際大会への参加経験者や日本代表や地区代表などの代表経験者の値が高いという結果を示したが、それが陸上選手の優秀さを示すものであるのかどうかは明確ではなかった。大学進学をめぐっては、陸上選手において推薦による進学者が高い割合を示した。このことを裏付けるように、半数以上の陸上選手たちが、大学進学にあたって大学関係者から影響を受けていた。

3. 引退について

ここではまず、選手たちの引退の時期やそのきっかけ、引退に伴う精神的な困難について検討される。統

いて、大学卒業後に引退を体験した者を対象に、卒業後の活動の形態、引退に伴う仕事上の困難などについてみてみることにする。

まずは、選手の引退の時期について検討してみよう。結果は表3-1に示した。全体的には、「大学卒業後」の引退が77%と最も高い割合を占めており、「大学卒業と同時に」が17%、「大学在学中」は7%であった。大学卒業後に引退した者について、さらにその時期を詳しくみると、大学卒業後1年から3年後とする者が21%、4年から6年後の者が27%、7年から9年後が20%、10年から12年後が22%であり、13年以上の者は10%であった。引退の時期と競技種目との間には、何等統計的に有意な関係は認められなかった。

選手たちがどのような経緯を経て引退したかについては、表3-2に示した。選手の91%にとって、引退の

表2-8 大学進学にあたっての影響

	非常に影響	少し影響	あまり影響を及ぼさない	全然影響を及ぼさない
大学の関係者 $\chi^2=.318^{***}$				
サッカー	27(8.5)	58(18.2)	54(17.0)	179(56.3)
陸上	55(26.3)	59(28.2)	36(17.2)	59(28.2)
計	82(15.6)	117(22.2)	90(17.1)	238(45.2)
高校の指導者 $\chi^2=.139^*$				
サッカー	123(36.5)	105(31.5)	35(10.4)	73(21.7)
陸上	99(44.4)	68(30.5)	30(13.5)	26(11.7)
計	222(39.6)	174(31.1)	65(11.6)	99(17.7)
運動部の先輩 $\chi^2=.107$				
サッカー	63(19.8)	69(21.7)	55(17.3)	131(41.2)
陸上	26(12.3)	57(26.9)	41(19.3)	88(41.5)
計	89(16.8)	126(23.8)	96(18.1)	219(41.3)
運動部の仲間 $\chi^2=.014$				
サッカー	22(7.0)	58(18.4)	84(26.6)	152(48.1)
陸上	14(6.6)	37(17.5)	58(27.5)	102(48.3)
計	36(6.8)	95(18.0)	142(26.9)	254(48.2)
家族 $\chi^2=.084$				
サッカー	45(13.8)	87(26.8)	53(16.3)	140(43.1)
陸上	35(16.7)	62(29.5)	40(19.0)	73(34.8)
計	80(15.0)	149(27.9)	93(17.4)	213(39.8)

註) カッコ内は% * $p<.05$ *** $p<.001$

表3-1 引退の時期

	大学在学中	大学卒業時	大学卒業後	$\chi^2=.078$
サッカー	21(6.0)	51(14.7)	276(79.3)	
陸上	17(7.5)	45(19.9)	164(72.6)	
計	38(6.6)	96(16.7)	440(76.7)	

註) カッコ内は%

決断はまったく自発的なものであり、「他者から強く決断を迫られ同意した」者や「強制的にやめさせられた」者は、ごく少数であった（それぞれ、2.1%と0.5%）。また、引退の理由についてみると（表3-3）、「体力的な限界」が25%で最も高い値を占め、続いて「意欲の減退」（23%）、「他の活動などによる時間的な制約」（21%）が続いている。「けが」で引退を余儀なくされた者は13%であり、「チームあるいは首脳陣とのトラブル」を引退の理由としてあげる者は2%と少数であった。このように、体力の限界や意欲の減退など、選手個人に帰属可能な理由を引退のそれとしてあげる者が約半数いるということ、また、ほとんどの者にとって引退が自発的なものであったことを考えあわせると、本研究の対象となった選手の多くにとって、競技生活からの引退が心的なダメージを伴わないものであったことを推測させる。

競技種目と引退の決断との間には関連性がないという帰無仮説は、1%水準の危険率で却下された。表3-2をみると、サッカー選手よりも陸上選手において、引退が「まったく自発的であった」とする者の割合が高いことが理解できる。個人の引退がチームに迷惑をか

けることがないため、と判断できるかも知れない。引退の理由と種目との関係が独立であるという帰無仮説も、0.1%水準の危険率で却下された。表3-3より理解できることは、サッカー選手において「体力的な限界」を引退の理由としてあげる者が多く、「意欲の減退」や「けが」をそれとして掲げる者が少ないということであるが、その理由については分からない。

引退時に、「あのときこうしていれば良かった」などと後悔することがあるかどうかについて検討したものが、表3-4である。「大いに」と「少しは」をあわせ「あった」とする者は35%、「あまり」、「全然」をあわせ「なかった」者は65%であった。後悔することが「あった」と答えた者に、その内容について記述してもらったところ、「もう少し努力していれば良かった」、「正しいトレーニング方法について知る努力をすべきだった」、「けがに対して適切な処置をすべきであった」といったような内容の記述が多くみられた。引退に伴う後悔と種目の関係は独立であるという帰無仮説は、5%水準の危険率で却下された。サッカー選手において後悔することがなかった者の割合が高く、陸上選手において後悔する者の割合が高いということが表より理

表3-2 引退の決断

	まったく自発的	他者と相談	決断を迫られ	強制的に	$\chi^2=.155^{**}$
サッカー	302(87.5)	31(9.0)	11(3.2)	1(0.3)	
陸上	213(95.5)	7(3.1)	1(0.4)	2(0.9)	
計	515(90.7)	38(6.7)	12(2.1)	3(0.5)	

註) カッコ内は% ** p<.01

表3-3 引退の理由

	体力の限界	意欲の減退	けが	時間的な制約	トラブル	その他	$\chi^2=.220^{***}$
サッカー	99(29.0)	60(17.6)	36(10.6)	73(21.4)	10(2.9)	63(18.5)	
陸上	41(18.3)	67(29.9)	38(17.0)	45(20.1)	0	33(14.7)	
計	140(24.8)	127(22.5)	74(13.1)	118(20.9)	1(1.8)	96(17.0)	

註) カッコ内は% *** p<.001

表3-4 引退に伴う後悔

	大いにあった	少しはあった	あまりなかった	全然なかった	$\chi^2=.136^*$
サッカー	32(9.4)	71(20.9)	168(49.4)	69(20.3)	
陸上	34(15.2)	61(27.4)	97(43.5)	31(13.9)	
計	66(11.7)	132(23.4)	265(47.1)	100(17.8)	

註) カッコ内は% *p<.05

表3-5 引退に伴う満足感と喪失感

	満足感でいっぱい	満足感強い	半々	喪失感強い	喪失感でいっぱい	$\chi^2=.070$
サッカー	44(12.9)	143(42.1)	101(29.7)	42(12.4)	10(2.9)	
陸上	36(16.2)	96(43.2)	65(29.3)	21(9.5)	4(1.8)	
計	80(14.2)	239(42.5)	166(29.5)	63(11.2)	14(2.5)	

註) カッコ内は%

表3-6 大卒後の活動の形態

	プロ	実業団・教職員チーム	地域のクラブ・サークル	個人的に	$\chi^2=.748^{***}$
サッカー	0	217(78.9)	56(20.4)	2(0.7)	
陸上	1(0.6)	40(24.7)	11(6.8)	110(67.9)	
計	1(0.2)	257(58.8)	67(15.3)	112(25.6)	

註) カッコ内は% *** $p<.001$

表3-7 職業生活の準備

	していた	していなかった	$\chi^2=.015$
サッカー	63(23.4)	206(76.6)	
陸上	35(22.2)	123(77.8)	
計	98(23.0)	329(77.0)	

註) カッコ内は%

解できるが、その理由については分からない。

引退するとき、「精一杯やった」という満足感と、「何か大切なものをなくしてしまう」という喪失感ではどちらがより強かったかという質問に対する答えをまとめたものが、表3-5である。喪失感が強かった者の14%に対して、満足の感情が強かった者は全体の57%であった。先に検討したような引退の理由と、引退に伴う後悔の有無の結果とをあわせて考えると、少なくとも半数以上の者は、精神的なトラブルを経験することなくうまく競技生活から離れることができたと判断しても良さそうである。

さてこのパートの残りでは、大学卒業後に引退を経験した者440名を対象にして、卒業後の活動の形態、引退に伴う仕事上の困難などについて順次検討してみよう。

まず表3-6には、選手たちが大学卒業後、どのようなところで競技選手としての活動を続けていたかについて示した。全体の60%近くが「実業団あるいは教職員チーム」で活動したとしており、「まったく個人的に」の26%、「地域のクラブあるいはサークル」の15%がそれに続いている。「プロチーム」での活動経験

者はわずか0.2%、1名にすぎない。これら活動の形態と種目間に関連はないとする帰無仮説は、0.1%水準の危険率で却下された。「実業団あるいは教職員チーム」、「地域のクラブあるいはサークル」で活動していた者はサッカーに多く、「まったく個人的に」活動していた者は陸上において多いということが表より理解できるが、個人で活動できるスポーツと、チームでしか活動できないスポーツの違いを反映する結果として解釈された。

競技選手としての活動をやめた後の職業生活のための準備を、事前に何か行っていたかどうかについての結果を示したものが、表3-7である。「行っていた」者の23%に対して、「行っていなかった」者は77%であった。「行っていた」者についてその内容を記述してもらったところ、「コーチのライセンスを取得した」、「仕事でも遅れをとらないよう残業して仕事をこなし」、「スポーツ指導者となるための勉強をした」などの記述が多くを占めた。これらの記述には、自らが教員であることを示唆するものが数多く含まれており、サンプルの属性について検討した際の、対象者の多くが中学校や高校の教師ではないかとの予測を支持しているように思われた。

引退後、職場におけるポジションや職業そのものに変化があったかどうかについて検討したものが、表3-8である。「変化なし」が90%、「同一企業（経営体）内の違う職場・部署などに配置換えとなった」、「これまでとは違う新たな職を外に得た」者はそれぞれ5%であった。引退に伴い失業した者は0.5%、2名であった。引退後に職場のポジションや職業に変化がない者

表3-8 職業・職場の変化

	変化なし	配置換え	転職	失業	$\chi^2=.170^{**}$
サッカー	231(87.2)	19(7.2)	15(5.7)	0	
陸上	151(94.4)	2(1.3)	5(3.1)	2(1.3)	
計	382(89.9)	21(4.9)	20(4.7)	2(0.5)	

註) カッコ内は% ** p<.01

表3-9 仕事上の困難

	非常に感じた	少し感じた	あまり感じなかった	全然感じなかった	$\chi^2=.104$
サッカー	7(2.7)	15(5.8)	90(34.6)	148(56.9)	
陸上	1(0.6)	4(2.6)	57(37.0)	92(59.7)	
計	8(1.9)	19(4.9)	147(35.5)	240(58.0)	

註) カッコ内は%

の数が多いのも、調査対象者の多くが教員であるためだと思われる。職業・職場の変化と種目間の関係は独立であるという帰無仮説は、1%水準の危険率で却下された。陸上と比較した場合、「同一企業（経営体）内の違う職場・部署などに配置換えとなった」、「これまでとは違う新たな職を外に得た」者がサッカーにおいて多い（それぞれ、1.3%対7.2%、3.1%対5.7%）ものの、その理由については不明である。なお、引退後も彼らの89%が指導者などとしてスポーツに関わり続けていた。

最後に、引退後「失業した」者を除いて、競技に打ち込んでいたことに由来する仕事上の困難をどの程度感じるかについて答えてもらった。表3-9に示すように、「非常に感じた」者と「少し感じた」者をあわせてもわずか6%であるのに対して、「全然感じなかった」者は58%、「あまり感じなかった」者を含めると94%が仕事上の困難を感じていないという結果であった。このような結果もまた、対象者に学校の教員が多く含まれていることに由来するものなのかも知れない。

以上検討してきたように、選手たちの多くは大学卒業後に競技生活から引退していたが、引退の決定はほとんどの選手にとってまったく自発的なものであった。引退の理由として彼らの約半数が、体力的な限界や意欲の減退など当該個人に帰属可能な理由を掲げていた。また、選手の半数以上が彼らの競技生活について後悔の念を抱いておらず、精一杯やったという満足感とともに引退しており、精神的なトラブルを経験することなくうまく競技生活から離れることができたようであった。このことは、自発的な引退の決定とその

理由に関連があるように思われた。大学卒業後に競技生活から引退した者の半数以上は、実業団や教職員のチームで活動を続けていたが、サッカーと比較した場合、陸上においてチームとは関係なくまったく個人的に活動していた者が多かった。種目特性によるものと判断された。約8割の者が、選手としての活動をやめた後の職業生活のための準備を特に行ってはいなかったが、引退により職を失ったり転職した者はごくごく少数であった。また、引退後に競技に打ち込んでいたことに由来する仕事上の困難を感じる者も、少数であった。調査対象者の多くが中学校や高校の教師であるために、これらの結果がもたらされたものと推察された。

4. 引退後について

このパートでは、調査対象者の現在の競技に対する関心やスポーツ活動の実態、生活の満足度などについて順次検討を加えていく。

『「スポーツをしていなかったら、自分の人生はもっとよいものになっていただろう」と後悔することがありますか」という質問に対する反応をまとめたものが表4-1である。「よくある」、「たまにある」とする者が7.5%であるのに対して、「あまりない」、「全然ない」とする者は92.5%にも達している。なかでも「全然ない」とする者の割合は70%と圧倒的に高く、引退後自らの競技人生をネガティブに評価している者が非常に少ないということを物語る結果であった。

次に、「人生をやり直せるとしたら、もう一度競技選手を目指したいと思いますか」という質問への反応

をみてみよう。結果は表4-2に示すとおりである。「できれば目指したい」とする者の割合が48%と最も高い値を示しており、次に「是非目指したい」の41%が続いているように、「目指したい」とする者は89%に達している。一方、「目指したくない」者は、「余り」と「全然」をあわせて11%であった。先の結果と同様に、ここにおいても、選手が自らの競技人生や競技そのものに対して、否定的な感情を抱いてはいないということをおうかがわせるような結果であった。

続いて、「あなたは、自分の子どもに一流競技選手を目指してほしいと思いますか」という質問結果について検討を加えてみよう。結果は表4-3に示してある。回答の割合が最も高かったのは、「できれば目指して

ほしい」(79%)であった。「できれば」と「絶対」を含め「目指してほしくない」者の割合が15.5%であったのに対して、「絶対目指してほしい」を含めて「目指してほしい」とする者は84.5%であり、子どもにも同じような選択をしてほしいと考える者が圧倒的に多い様子が理解できる。

表4-4に示すように、選手時代に負ったけがに現在でも悩まされることがあるかということについてみると、「ある」者と「ない」者がほぼ同様の割合で存在していることが確認された。

競技選手時代のことについて他人に話をすることがあるかどうかについては、57%が「ときどきある」と答えており、「よくある」の11%を加えると「ある」

表4-1 後悔

	よくある	たまにある	あまりない	全然ない	$\chi^2=.044$
サッカー	3(0.9)	23(6.6)	81(23.1)	243(69.4)	
陸上	4(1.8)	13(5.8)	52(23.0)	157(69.5)	
計	7(1.2)	36(6.3)	133(23.1)	400(69.4)	

註) カッコ内は%

表4-2 再度競技者を目指すか

	是非目指したい	できれば目指したい	あまり目指したくない	全然目指したくない	$\chi^2=.109$
サッカー	145(42.0)	166(48.1)	31(9.0)	3(0.9)	
陸上	88(39.1)	110(48.9)	18(8.0)	9(4.0)	
計	233(40.9)	276(48.4)	49(8.6)	12(2.1)	

註) カッコ内は%

表4-3 子供が競技者

	絶対目指して	できれば目指して	あまり目指してほしくない	絶対目指してほしくない	$\chi^2=.117$
サッカー	17(5.2)	258(79.1)	49(15.0)	2(0.6)	
陸上	15(7.1)	165(77.8)	25(11.8)	7(3.3)	
計	32(5.9)	423(78.6)	74(13.8)	9(1.7)	

註) カッコ内は%

表4-4 選手時代に負ったけが

	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない	$\chi^2=.034$
サッカー	40(11.4)	132(37.7)	71(20.3)	107(30.6)	
陸上	26(11.5)	81(35.8)	52(23.0)	67(29.6)	
計	66(11.5)	213(37.0)	123(21.4)	174(30.2)	

註) カッコ内は%

とする者の割合は67%になる(表4-5参照)。競技種目ごとにこれらの結果に違いがあるのかどうかについてみると、関係の独立性に関する帰無仮説は、5%水準の危険率で却下されていることが分かる。しかし、どのような理由から違いが生じたのか推察することは不可能であった。

競技していたスポーツの報道に今でも関心があるかどうかについては、表4-6に示すとおりである。全体の76%が「非常にある」と答えており、「あまりない」、「ほとんどない」者はわずか3%、17名にすぎなかった。スポーツ報道への関心と競技種目間には関連はないとする帰無仮説は、0.1%水準の危険率で却下されている。関心が「非常にある」者はサッカーにおいて高い割合を示している(82%対67%)が、このような結果は、Jリーグのスタートと、その熱のこもった報道のあり方を反映しているのかも知れない。

さてここで、現在のスポーツとの関わりについて少し触れておくことにしよう。表4-7には、現在のスポーツ活動について示してある。選手時代に競技を行っていたスポーツについては、ほぼ半数に近い人たち(45%)が、「ほとんど行っていない」としており、「月1～2日程度」がそれに続いている(18%)。しかしながら、「週5日以上」行っている者も13%ほど存在している。競技していたスポーツ以外の運動やスポーツとの関わりについては、「週1～2日」、「月1～2日程度」、「ほとんど行っていない」とする者が20%から30%代を占めているが(それぞれ、26%、23%、30%)、「週5日以上」行っている者は10%であった。スポーツの実施率と種目間の関係は独立であるとする帰無仮説は、競技を行っていたスポーツに関して0.1%水準の危険率で却下された。「ほとんど行っていない」とする者が陸上において多く(サッカーの38%に対して

表4-5 選手時代のこと

	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない	$\chi^2=.118^*$
サッカー	33(9.4)	214(61.1)	78(22.3)	25(7.1)	
陸上	30(13.2)	112(49.3)	63(27.8)	22(9.7)	
計	63(10.9)	326(56.5)	141(24.4)	47(8.1)	

註) カッコ内は% * $p<.05$

表4-6 スポーツの報道

	非常にある	少しはある	あまりない	ほとんどない	$\chi^2=.183^{***}$
サッカー	286(81.7)	56(16.0)	8(2.3)	0	
陸上	151(66.5)	67(29.5)	7(3.1)	2(0.9)	
計	437(75.7)	123(21.3)	15(2.6)	2(0.3)	

註) カッコ内は% *** $p<.001$

表4-7 スポーツの実施頻度

	週5日以上	週3～4日	週1～2日	月1～2日	ほとんど行っていない
競技していたスポーツ $\chi^2=.229^{***}$					
サッカー	51(15.1)	23(6.8)	60(17.8)	77(22.8)	127(37.6)
陸上	19(9.2)	12(5.8)	38(18.4)	19(9.2)	119(57.5)
計	70(12.8)	35(6.4)	98(18.0)	96(17.6)	246(45.1)
その他の運動・スポーツ $\chi^2=.101$					
サッカー	26(8.0)	39(11.9)	80(24.5)	83(25.4)	99(30.3)
陸上	26(12.3)	27(12.8)	58(27.5)	40(19.0)	60(28.4)
計	52(9.7)	66(12.3)	138(25.7)	123(22.9)	159(29.6)

註) カッコ内は% *** $p<.001$

58%),「週5日以上」行っているとする者はサッカーにおいて多い(陸上の9%に対して15%)という結果を示した。このような結果は、サッカーがチームスポーツであり、しかも広範なスペースと設備がないと実施できないような種目であることを考えると理解しがたいもののように思われる。

指導者などとして現在スポーツと関わりを有しているかどうかについてみたものが、表4-8である。「関わりはない」とする者が全体の18%であるのに対して、82%の者は指導者または役員、あるいはその両者として現在でもスポーツに関わりを有している様子がうかがえる。何らかの関わりをもつ者のなかでも、「指導者・役員の両方として関わりがある」者の割合が41%と最も高い値を示しているように、競技に対する関心の高さや関係の深さを物語るような結果であった。スポーツとの関わりと種目間の関係は独立であるとする帰無仮説は、1%水準の危険率で却下された。しかしながら、その原因について推察することは困難であった。

表4-9には、現在の仕事のやりがいについての結果を示した。現在の仕事が、過去において「打ち込んでいた競技と同じくらいにやりがいを感じる」とする者

は66%と最も高い値を占め、「打ち込んでいた競技以上にやりがいを感じる」者が19%とそれに続いている。一方、「打ち込んでいた競技に比べるとやりがいを感じない」者は16%であった。このような職業生活に関する満足度は、それがどれほど満足できる収入を保証しているのかということと無関係ではなかろう。したがって次に、収入の満足度についてみてみることにしよう。結果は表4-10に示すとおりである。「大変満足している」者は6%とさすがに多いとはいえないものの、「とても不満である」者(4%)を下回ってはいない。「まあまあ満足している」者が全体の62%を占めており、「大変満足している」者をあわせると「満足している」者は68%に達している。このように本研究の対象者の多くからは、収入に関して不満足な生活を送っている様子をうかがい知ることにはできないように思われるが、このことは、度々触れてきたように、「公務員・教員」がサンプル全体の71%を占めていたことと関連があるのかも知れない。最後に、生活全体をトータルに評価してもらった場合にも、「非常に不満足」とする者はわずか2%、9名であり、「非常に」と「まあまあ」をあわせ「満足」である者は82%にも

表4-8 スポーツとの関わり

	指導者として	役員として	指導者・役員として	関わりなし	$\chi^2=.146^{**}$
サッカー	116(33.4)	35(10.1)	123(35.4)	73(21.0)	
陸上	72(31.9)	13(5.8)	103(48.2)	32(14.2)	
計	188(32.8)	48(8.4)	232(40.5)	105(18.3)	

註) カッコ内は% ** p<.01

表4-9 現在の仕事のやりがい

	競技以上	同じくらい	競技以下	$\chi^2=.009$
サッカー	64(18.8)	223(65.1)	54(15.8)	
陸上	41(18.2)	149(66.2)	35(15.6)	
計	105(18.6)	372(65.7)	89(15.7)	

註) カッコ内は%

表4-10 収入の満足度

	大変満足	まあまあ満足	あまり満足していない	とても不満	$\chi^2=.028$
サッカー	23(6.6)	217(62.2)	94(26.9)	15(4.3)	
陸上	13(5.7)	139(61.2)	66(29.1)	9(4.0)	
計	36(6.3)	356(61.8)	160(27.8)	24(4.2)	

註) カッコ内は%

表4-11 生活満足度

	非常に満足	まあまあ満足	少し不満足	非常に不満足	$\chi^2=.065$
サッカー	42(12.0)	249(71.1)	52(14.9)	7(2.0)	
陸上	25(11.1)	157(69.5)	42(18.6)	2(0.9)	
計	67(11.6)	406(70.5)	94(16.3)	9(1.6)	

註) カッコ内は%

達している(表4-11参照)。この値は、年収に関する満足度の値よりもさらに高いものであるが、収入のみならず、仕事のやりがいや家庭生活の満足度などを反映する結果であるように思われる。

競技選手の引退をめぐることは、その後の社会生活や職業生活の困難やそれへの適応の問題が度々指摘されており、実際、それらがジャーナリズムを賑わわせることがあることを我々は知っている。しかしながら、少なくとも本研究の対象者に限っては、これらの問題点なり困難なりを多数にとってのそれとして確認することは不可能であるように思われる。過去に行っていた競技については今でも関心があり、競技者としてではないものの関わっている者が多数を占めていた。さらに、競技を行っていたことを悔いてはいなく、チャンスがあれば今一度関わりをもちたいと思っており、子どもにもそれを望んでいる。現在の仕事やそれがもたらす収入にも、大方は満足している。これらすべてのことは、多くの者が自発的に競技生活に終止符を打つことができたということ、そして先生としてある程度保証された生活を送ることができているということと無関係ではないはずである。

おわりに

これまで検討してきたように、本研究においては、選手の競技生活からの引退のネガティブな影響を、少なくとも量的な観点から確認することは不可能であった。このことの原因として、本研究においては、引退の決断を迫られたり、強制的にやめさせられたりした者の数が非常に少なかったこと、また彼らの多くは、競技生活からの引退に伴う失業や再就職を経験することなく、引退後も職業生活上の困難を感じてはいなかったこと、彼らの多くが、教職という経済的に比較的安定した職を得ることができていたことなどが指摘できるように思われる。また彼らにおいては、収入のみならず生活に対する満足度も高かったが、これには指導者などとして競技への関わりを維持することができていることなどが影響しているものと思われる。とは

いえ、これらの「明るい」結果をもって、競技選手の引退に問題がないのだと結論を下すのは尚早であるように思われる。対象者を、高度な能力を有するオリンピック代表選手やプロの選手等に絞込んだ詳細な検討が、今後必要とされよう。

付 記

本研究は、文部省科学研究費による補助(基盤研究C, 2 課題番号07808010)を受けて行われた研究の一部である。

文 献

- 1) Allison, M. T. and Meyer, C.: Career Problems and Retirement Among Elite Athletes: The Female Tennis Professional. *Sociology of Sport Journal*, 5: 212-222, 1988.
- 2) Coakley, J. J.: Leaving Competitive Sport: Retirement or Rebirth?. *Quest*, 35:1-11, 1983.
- 3) Curtis, J. and Ennis, R.: Negative Consequences of Leaving Competitive Sport? Comparative Findings for Former Elite-Level Hockey Players. *Sociology of Sport Journal*, 5:87-106, 1988.
- 4) 海老原修: トップアスリートの光と影. 体育科教育, 41(1):28-31, 1993.
- 5) Kleiber, D. A. and Brock, S. C.: The Effect of Career-Ending Injuries on the Subsequent Well-Being of Elite College Athletes. *Sociology of Sport Journal*, 9:70-75, 1992.
- 6) Lerch, S. H.: The Adjustment to Retirement of Professional Baseball Players. In Greendorfer, S. L. and Yiannakis, A. (Eds.), *Sociology of Sport: Diverse Perspectives*. Leisure Press, N.Y., 1981. pp. 138-148.
- 7) McPherson B. D., Curtis, J. E. and Loy, J. W.: Sport, Socialization, and the Family. In McPherson B. D., Curtis, J. E. and Loy, J. W. (Eds.), *The Social Significance of Sport: An Introduction to*

- The Sociology of Sport. Human Kinetics Books, Illinois, 1989. pp. 37-63.
- 8) Rosenberg, E.: Gerontological Theory and Athletic Retirement. In Greendorfer, S. L. and Yiannakis, A. (Eds.), *Sociology of Sport: Diverse Perspectives*. Leisure Press, N.Y., 1981. pp. 118-126.
- 9) 多々納秀雄：エリート・スポーツ選手における引退後の生活と意識. *学校体育*, 36(6):128-133, 1989.
- 10) Thomas, C. E. and Ermler, K. L.: Institutional Obligation in the Athletic Retirement Process. *Quest*, 40:137-150. 1988.
- 11) Werthner, P. and Orlick, T.: Retirement Experience of Successful Olympic Athletes. *International Journal of Sport Psychology*, 17:337-363, 1986.
- 12) 山本教人, 多々納秀雄, 吉田 毅, 三本松正敏, 松尾哲矢：高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向. *健康科学*, 21:29-39, 1999.
- 13) 吉田 毅, 山本教人, 多々納秀雄：スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究－先行研究の検討－. *健康科学*, 21:69-75, 1999.